

<研究ノート>

聖路加病院はいつ誕生したか

—築地外国人居留地の歴史に関連して—

川崎 晴朗*

When Was St. Luke's Hospital at Tsukiji Opened?

—In Conjunction with the History of the Tsukiji Foreign Settlement—

KAWASAKI Seiro*

要 旨

築地外国人居留地の撤廃後その跡地の一部で開院した聖路加病院について、最近までその正確な開院日が明らかではなく、1902年（明治35年）とする説が広く流布されてきた。筆者はこれまで *Chapel News*、『明るい窓』に寄せた諸稿で聖路加病院の開院は1901年（明治34年）2月8日から15日の間であると主張してきたが、大江満氏が初代院長トイスラー医師の手になる書簡を発見し、その結果、聖路加病院の開院日が1901年2月12日であったことがはっきりした。

SUMMARY

St. Luke's Hospital at Tsukiji, Tokyo, was established by Dr. Rudolph Bolling Teusler who had arrived at Yokohama in February 1900. The exact date at which the hospital began operating, however, had not been determined until fairly recently. In the archives of the U.S. Prebysterian Mission in Japan, Mr. Mitsuru Ōe, a historian at St. Paul's University, has found a letter written by Dr. Teusler himself in which he made it clear that he had opened the hospital on February 12, 1901.

*Historia vero testis temporum, lux veritatis, vita memoriae,
magistra vitae, nuntia vetustatis,*

—Marcus Tullius Cicero, *De Oratore*, II, ix, 36¹⁾

1. はじめに

聖路加国際病院 (St. Luke's International Hospital) は東京都中央区明石町にある。こ

こにはかつて築地外国人居留地37番という小さな地所があり (497坪2合)、これが聖路加病院 (のち聖路加国際病院) の発祥地である。1899年 (明治32年) 7月に居留地制度が廃止

* 愛知大学国際問題研究所、University of Aichi Institute of International Affairs

されたあと、それまで築地居留地を構成していた区画は京橋区明石町となり、居留地37番は明石町37番地となった。病院の敷地はその後拡大され、旧居留地のほぼ南半分を占めるまでに至っている（現在の住居表示では東京都中央区明石町8番1号、9番1号及び10番1号）。

本稿は、筆者が長年たずさわってきた築地外国人居留地研究の一環を構成するものである。トイスラー（Rudolph Bolling Teusler）を初代院長とする聖路加病院について「謎」があったとすれば、それは病院がいつ開院したかということである。この問題に関しては、筆者は1998年から2004年にかけて主として立教学院チャプレン会編の *Chapel News*、聖路加国際病院『明るい窓』などに寄せた諸稿で論じ（とくに *Chapel News*、2003年1月号、21頁）²⁾、また、これらの稿を踏まえて、2002年10月刊の著書『築地外国人居留地—明治時代の東京にあった「外国」—』（雄松堂出版、2002年）³⁾で病院の開院は1901年2月8日から15日の間である旨述べた（199、204、206、231頁）。

実は、筆者が本稿を脱稿したのは2016年12月末のことであるが、偶然にも2017年1月号の『明るい窓』に聖路加病院の開院日に関する興味深い記事が掲載された。筆者は聖路加国際大学の法人事務局・野村牧人氏であるが、大学史編纂・資料室の松本直子（室長）、新沼久美、渡部尚子及び藪純夫の各氏が協力されたとのことである。

これに先立って、立教学院史資料センターの大江満氏はトイスラー医師自身の手になる書簡を発見され、これによって聖路加病院の開院日が1901年2月12日であることがはっきりした。非常に貴重な発見である。『明るい窓』の前記記事はこれを伝えるものである。

上記の諸氏のお陰で正確な聖路加病院の開院日が判明した。かくて、聖路加病院をめぐる「謎」が消滅したことになる。

2. トイスラー医師の着任

トイスラー医師は1900年（明治33年）2月2日、夫人と共に来日した。横浜で発行されていた同年2月10日付 *The Japan Weekly Mail (JWM)* の“Latest Shipping”欄を見ると（149-150頁）、夫妻は東洋汽船会社の香港丸（3,047トン、船長 W. E. Filmer）で到着したが、この船はサン・フランシスコを出帆、ホノルル経由で横浜に到着した⁴⁾。乗客名簿では“Mr. R. B. Teusler and wife”となっている。中村徳吉氏によると、横浜には誰も出迎えていなかった、しかしトイスラー医師は「彼一流の強引さと巧妙さ」をもって東京の目的地に着いた、夫妻はホテルに宿泊、2ヵ月後に京橋区明石町13番地（旧築地居留地13番）の住まいに着いた、という⁵⁾。やはり横浜で発行されていた年刊の在日外国人人名録、*The Japan Directory* の1900年版にはまだトイスラー夫妻の氏名はないが、1901年版の“Tsukiji”の欄を見ると、（明石町）13番地に“Dr. R. B. Teusler”とある（116頁）。1901年版はおそらく前年の状況を記録したものであろう。なお、38番地は Rt. Rev. J. McKim の居住地となっている（117頁）⁶⁾。

1902年版になると、はじめて聖路加病院が37番地をアドレスとして掲げられた。スタッフも次の通り掲示されている（136頁）。

Dr. R. B. Teusler, Physician in charge.

Dr. M. Kawase, Physician in charge.

Dr. T. Makita, Physician in charge.

M. Kawase は川瀬元九郎医師、また T. Makita は蒔田庭二郎医師である。トイスラー医師は、まず2人の日本人医師と共に開院したことになる。

1903年版 *The Japan Directory* は病院の電話番号として「新橋局3014番」を掲げたほか、スタッフの氏名及び彼等の診察時間及び専門

分野を次のように示している（161頁）。

Dr. Julius Scriba—Consultation Hours:
Tuesday, Wednesday and Friday—From
9 to 11 a.m.

Dr. R. B. Teusler—Consultation Hours:
Daily—From 9 to 12.

Dr. Makita—Consultation Hours: Daily—
From 9 to 12.

Dr. J. D. Macdonald—Consultant on
Practice and Diseases of Children.

Dr. Whitney—Consultant on Eye and Ear.

1904年版 *The Japan Directory* で気付くことは、聖路加病院と同じアドレスに St. Luke's Pharmacy が掲げられていることである。また、この薬局は“Agents for Brett & Co. Yokohama”となっている（162頁）。

1904年版以降の記載ぶりについては省筆することとしたい。

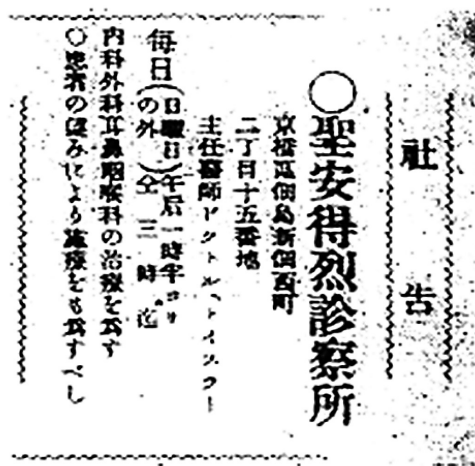
3. 聖アンデレ診察所及び聖路加病院の開設日

東京にあった基督教週報社は『基督教週報』を発行していたが⁷⁾、1901年（明治34年）2月15日付の同誌に、トイスラー医師が佃島に開設した「聖安得烈診察所」の「社告」が載っている（16頁。3月22日付及び3月29日付では広告欄に掲載）。この社告を図版1として掲げよう。（図版1及び3では診察所のアドレスが京橋区佃島新佃西町二丁目15番地となっているが、佃島新佃島西町二丁目15番地が正しい。図版6を参照されたい。）筆者はこの社告のコピーを *Chapel News* の2001年11月号、12月号、2002年2・3月号でも使用している（それぞれ40頁、27頁、36頁）。また、聖安得烈診察所（聖アンデレ診察所）は「佃島施療所」として3月8日付の『基督教週報』で改めて記事になっている（16頁）。この記

事を図版2として掲げる。そのコピーは、*Chapel News* の2001年12月及び2002年3月号にも掲載した（それぞれ27頁、26頁）。

1901年2月15日付『基督教週報』は、図版3で示すように聖路加病院の開院広告を掲げている（16頁。病院名、場所、5名の医師名を掲げている。）⁸⁾ したがって、当然のことながら病院はこの日またはその直前に開院したと考えなければならない（この点につき、拙著『築地外国人居留地』、204頁）。さらに、図版2で明らかなように、同年3月8日付『基督教週報』は前述の佃島施療所に関する記事と共に「一度閉ぢられし築地病院は復活せられて聖路加病院と相成、…」という記事を掲げている（14頁）。筆者は、コピーを *Chapel News* の2002年3月号に掲げた（36頁）。この記事によると、同年2月19日、病院で演芸会が開催されたという。これにより、聖路加病院の開院がおそらく同年2月19日以前であったことがわかる。かくて、聖アンデレ診察所及び聖路加病院がいずれも1901年早々に設置されたことを確実な資料に基づいて知ることができるのである。

さらに言えば、佃島の診察所の開設時期を



図版1 1901年2月15日付『基督教週報』
(16頁)

○佃島施療所
 今年度ドクトル、トイスラー氏主任となり、佃島に施療所を新設せらるる海保熊次郎氏は専ら傳道の方面に盡力せらるる事とあり同所に轉居せられたり是はトイスラー氏を中心とせる西洋人間の聖安得烈同胞會の事業ありと云ふ。

○ウツド氏
 聖安得烈同胞會事業擴張の爲め奈良より上京目下東北地方巡回中來る八日には神田基督教會青年有志の爲に演説の筈

▲一度閉ぢられし築地病院は復活せられて聖路加醫院と相成、ドクトルトイスラー氏院長として圭刀をとり、ドクトル川瀬元九郎、ドクトル、マクドナルド、蒔田庭二郎、ドクトル、ホイットニー氏の諸氏各其専門の科に於て助けらるる事と相成候二月十九日演藝會を催したるに百二十圓の收入ありし由に候

図版2 1901年3月8日付『基督教週報』（14及び16頁）

社告

○聖安得烈診察所
 京橋區佃島新佃町
 二丁目十五番
 主任醫師ドクトル、トイスラー

○院開廣告
 京橋區明石町三十七番（新榮橋北社）
 築地聖路加病院
 院長外科婦人科
 ドクトル、トイスラー

内科小兒科
 ドクトル 川瀬元九郎
 ドクトル マクドナルド

眼科耳科
 ドクトル 蒔田庭二郎
 ドクトル ホイットニー

診察時間 午前九時ヨリ同十二時迄
 當直醫員診察時

○患者の望みにより施療をも爲すべし

毎日（日曜日）午後一時半ヨリ
 （の外）全三時迄

内科外科耳鼻咽喉科の治療を爲す

図版3 1901年2月15日付『基督教週報』（16頁）

1901年1月後半に絞ることが可能である。著書『築地外国人居留地』に書いたように、トイスラー医師は本部あて1900/1901年度年次報告（1901年6月30日までの1年間をカバーしている。）で、1901年1月後半、築地に近いある島に施療所を設けた、と同医師がはっきり述べているからである（205頁）。この年次報告の記述については、筆者は *Chapel News* の2001年11月号で触れた（41頁）。

一方、聖路加病院については聖アンデレ診察所より少し遅れ、1901年2月前半に開院したと考えられる。前述のように開院広告は1901年2月15日付『基督教週報』に載ったが、具体的には2月15日、またはその直前、すなわちこの日付と同誌の前号の刊行日（同年2月8日）との間の開院であると考えてよいであろう。

——筆者が資料を渉猟して確定または推

測したことは以上の通りである。筆者は、*Chapel News* に掲載の「聖路加病院の歴史 その1 トイスラー医師と佃島診療所」(1)～(7)及び「聖路加病院の歴史 その2 聖路加病院はいつ開院したか」(1)～(9)(2001年11月-2002年6月及び2002年9月-2004年1月)ではほぼ同じことを述べている。いずれにせよ、トイスラー医師は来日後わずか1年で聖路加病院の開院に漕ぎつけたことになる(末尾の[付記2]を参照)⁹⁾。

4. 聖路加病院の正確な開院日

2017年1月号の『明るい窓』によると、今般トイスラー医師が米国聖公会にあてた1901年6月30日付の書簡が発見されたが、これに“St. Luke’s Hospital, 37 Tsukiji. Opened Feb. 12-1901”とあり、同医師の筆跡で病院が1901年2月12日に開院したことがはっきり記述されている(23頁)。この書簡は、「はじめに」で触れたように、立教学院史資料センターの大江氏によって発見されたものである。

この書簡原本は米国聖公会文書館(米国テキサス州にある。)に保管されており、その複写版を日本聖公会管区事務所がマイクロフィルムの形で所蔵している。これに含まれる1901年6月30日付トイスラー医師の書簡(No. 14-8-142)の関連部分を野村氏の記事から借用し、**図版4**として掲げよう。なお、この関連部分の掲載については大江氏の快諾を頂いた。

5. 聖路加病院のこれまでの立場

(1) 聖路加国際病院八十年史編纂委員会編『聖路加国際病院八十年史』(聖路加国際病院刊、1982年)(以下、『八十年史』)は「序章 聖路加80年の記録」の冒頭で「1982年は聖路加国際病院開設80周年に当たり記念すべ

St. Luke's Hospital, 37 Tsukiji	
Opened Feb. 12-1901.	
Report to June 30-1901.	
No. of the patients	
" deep treatment, in patients,	5
" " " " " " " " " " " "	67
" " " " " " " " " " " "	226
" " " " " " " " " " " "	782
" visits outside to dependent patients,	56
" operations	9
" Prescriptions filled,	1257
St. Andrew's Protestant Mission, Highmancy	
Opened June 27-1901.	
No. of the patients	
" " " " " " " " " " " "	73
" " " " " " " " " " " "	285
" " " " " " " " " " " "	38
" " " " " " " " " " " "	300
Some minor surgical work and drainage	
Total No. of our patients 289.	
" " " " " " " " " " " "	1412
" " " " " " " " " " " "	1557.
Patrick H. Towle, M.D.	

図版4 1901年6月30日付トイスラー書簡より

き年である。」と記述している(3頁)。すなわち、1902年を開院の年としていることがわかる。同書は、つづいて長田重雄医師が1890年11月に愛恵病院の院長となったが、同病院は1896年6月、築地居留地37番(同書は「明石町37番地」としている。)に移り、築地病院と改称した旨、また1899年秋、長田院長は辞任した旨を述べる(5頁、この点については7.を参照)。その上で「1901年(明治34)2月、トイスラーは基督教週報に開院広告を出した。(注 病院名を示していない。)…同時に社告として佃島に診療所を開設したことが出ている」と書き(6頁)、また1902年2月、築地病院は聖路加病院と改称されて生まれ変わった、と書く(7頁)。しかし、そもそも愛恵病院が築地病院と改称したのは1896年である。『八十年史』の記述は奇妙であると言わざるを得ない。しかも、聖路加国際病院が20年後に発行した『聖路加国際病院の百年』(2002年)(以下、『百年史』)も同じような記述をそのまま繰り返している(70-2頁)。

また、聖路加国際病院の西口近く、聖ルカ

像わきの壁面に「聖路加国際メディカルセンターの歴史年表」が描かれているが、ここに

- 1900年（明治33年）2月2日 トイスラー
夫妻来日
- 1901年（明治34年）トイスラー医師が佃島
に施療診察所を開設
- 1902年（明治35年）聖路加病院設立（旧明
石町37番地）

とあり、佃島診察所及び聖路加病院の写真が添えられている。しかし、この年表も『基督教週報』に掲載された聖路加病院の開院広告、トイスラー医師の年次報告等を無視していることは明白である。（4. で述べた『明るい窓』の記事は当時まだ発見されていなかったのと言及できなかったことは当然であるが。）

6. トイスラー医師と聖アンデレ診察所

実際には、前述したところから明らかなように、トイスラー医師は来日約1年後の1901年1月後半、佃島に聖アンデレ診察所という名の診察所を設立し、また同年2月12日、明石町37番地（旧居留地37番）で聖路加病院を発足させたのである。

トイスラー医師は病院に午前中勤務し（これは前述の1903年版 *The Japan Directory* の記述と一致する。）、あとは他の医師に任せ、自宅を出て船松町（現在の住居表示では中央区湊三丁目）の船着場へ行き、船頭が櫓で操る渡し舟で聖アンデレ診察所に通った。それは『基督教週報』の社告（または広告）にあるように、日曜日を除く毎日のことであった。

佃島は隅田川にある中州で、これと船松町とを結ぶ「佃の渡し」は江戸時代からあった。トイスラー医師はこれを利用して（利用せざるを得なかった）のである¹⁰⁾。木下空太郎は『スバル』の1910年（明治43年）2月号に異国情緒あふれる（日本人から見て）「築

地の渡し」を発表したが、トイスラー医師はその約10年近くも前、毎日のように手漕ぎの舟から隅田川や川岸の風景を眺めていた。彼はこの風景（これには来京後しばらく彼が滞在したと推定されるホテル・メトロポールも含まれていた。）にどのような感慨を抱いたことであろうか。また筆者は、船頭や他の船客と交わす会話は、診察所や病院での患者たちとの問答と同様、彼にとって日本語の習得の一つの機会であったのかも知れないな、と思う。日本語についてであるが、トイスラー医師は「彼一流の強引さと巧妙さをもって」あらゆる機会を逃がさず、比較的短時間でかなり話せるようになったのではないか。

トイスラー医師が明石町から佃島に通ったのは「内科耳鼻咽喉科の治療を為す」ためであった。社告（または広告）は「患者の望みにより施療を為すべし」ともいっているが、彼は診察所で患者の診察を行ない、必要と判断すれば聖路加病院に送り込んだのであろう。1901年12月20日付『基督教週報』は診察所を「築地聖路加病院の出張診察所」としている（13頁）。この記事は *Chapel News* の2002年4月号に掲げたが（19頁）、改めて本稿に**図版5**として掲げよう。

『百年史』は「佃島診察所は築地の病院のために在るので、…病院に来る患者がふえる。」といている（71頁）。この点は正にその通りであろう。実際に、しばらくの間、聖アンデレ診察所は聖路加病院の出張診察所の役割を果たしていたのである。

聖アンデレ診察所は京橋区佃島新佃島西町二丁目15番地にあり、渡し舟の発着場にも近い（**図版6**）。同町15—18番地は現在の中央区佃二丁目11番地で、八重洲通り（中央大橋から清澄通りまでの部分は通称「中央大橋通り」である。）及び佃大通りに挟まれた区画である。現在、その東半分（隅田川寄り）には32階建ての *The Crest Tower* が聳えており、西半分には *Primavera*、*Park Axis* 月島、

Crestform 月島等のマンション、木かげ美容室、月島治療院等、多くの建物がある。この区画に百年以上の昔、聖アンデレ診療所が置かれていたのである¹¹⁾。

7. 聖路加病院の「前史」

筆者の感想を申し上げるならば、聖路加病院の開設日の特定を困難にしてきた一因は同病院に複雑な「前史」があることではないか。愛恵病院（及びその後身、築地病院）がそれである。トイスラー医師を日本に送り込んだのは米国聖公会であるが、同医師にはハレル（Dr. Frank W. Harrell）、ロー（Dr. Victor M. Law）、セルウッド（J. J. Selwood）、そして長田重雄という4人の「前任者」がいた。筆者はとくに『明るい窓』の1998年9月から2002年3月号までの諸稿でこの点を詳しく取り上げた。

長田医師は、聖公会のウィリアムズ主

◎京橋区新田島敷況
 新田島西町には築地聖路加病院の出張診療所あり、此處に毎日曜、水曜、金曜の夜に説教及び聖書講義あり傳道師海保熊次郎君の盡力により追々傳道の門戸開けたり以前ミスベリー氏の働かれたる時とは全く其趣を異にし求道者も起りて將來有望となれり近來神學校よりは三須彦良氏來助せらる來月三一教會に於て信徒接手式を受くべからるの四名あり去入日午後大沼次郎太氏の備にて同氏の産後感謝式あり多川牧師の司會にて二十名斗の來衆ありたり

図版5 1901年12月20日付『基督教週報』(13頁)



〔出典〕東京通信管理局編『東京市京橋区』

図版6 1911年（明治44年）の東京府京橋区（一部）

教 (Channing Moor Williams)¹²⁾ の徳憑で1890年(明治23年)11月、京橋区船松町13番地に愛恵病院(英語ではTokyo Dispensaryといった。)を開設してその院長となった。(同医師は聖公会の信徒であった。)¹³⁾ この病院は1896年(明治29年)6月13日に築地居留地37番に移転し、「築地病院」と改称された¹⁴⁾。この病院は1899年(明治32年)秋まで存続した。すなわち、築地居留地が廃止される前後までである。同病院については、1897年7月10日付の『教界評論』第55号に創立1周年の「感謝会」が開かれた旨の記事が載っている(24-5頁。筆者は、これをChapel Newsの2002年12月号で紹介した、24頁)。

さて、トイスラー医師が来日約1年後の1901年2月に聖路加病院をスタートさせたのは旧築地居留地37番、すなわち、築地病院の跡地においてであった。そればかりではない。築地病院の英語名はSt. Luke's Hospitalであった。この点は、拙著に書いた通り(202頁)、ウィリアムズ主教の本部あて年次報告から明白である¹⁵⁾。すなわち、1901年2月に発足した聖路加病院は1899年(明治32年)秋に閉鎖された築地病院の「後身」なのである。同年3月8日付『基督教週報』が報じたように、築地病院の「復活」といってもよい(図版2)。筆者の想像であるが、この病院の名称を英語でSt. Luke's Hospitalとしたのはおそらくウィリアムズ師であろう。ともかく、少なくとも在日外国人の間では、同病院は1896年なかば以降はSt. Luke's Hospitalの名称で知られていたのである。

繰り返すようであるが、旧病院の「復活」の際、英語名は変わらなかった。改称したのは日本語名だけだったのである。トイスラー医師が1900年に来日したのはウィリアムズ師のあとを引継いで「江戸主教」に接手されたマキム主教(John McKim)の本部に対する要請が実ったものであるが、トイスラー医師

が築地病院の施設を引継いだ際、病院の日本語名を英語名にあわせて「聖路加病院」とした。では、誰がこの日本語名の改称を決めたのであろうか。1901年2月15日付『基督教週報』の開院広告(図版3)に名前のある川瀬及び蒔田医師の2人であると推察できると思う。

ところで、筆者は英字新聞The Japan Weekly Mailの1901年2月23日付で同月19日、築地の聖路加病院の講義室(lecture-hall)で演芸会があり、トイスラー医師自身も役者の1人であった、という記事を発見した(190頁)¹⁶⁾。1901年2月19日といえば聖路加病院が開院した直後のことである。演芸会は、同病院の支援を目的に開かれたものであった。

8. 聖路加国際病院に望むこと

トイスラー医師自身が聖路加病院の開設日をはっきり記録していることが判明し、聖路加国際病院は今後その初期の歴史を書き替えることとなろう。否、書き換えなければならない。キケローは「歴史は…時代の証人であり、真実に光を当てる。」といった。また、Thomas Babington Macaulayは名著として知られるHistory of England from the Accession of James the Second(全5巻、1848-62年)で“dignity of history”という表現を用いた¹⁷⁾。「歴史の威厳」——いかなる理由をもってしてもこれを損なうべきではない、と筆者は信じている。

* * * * *

聖路加病院は1901年2月12日、トイスラー医師を院長として開院したことが判明したが、実質的には、それは築地病院の再開または復活であった。筆者は『築地外国人居留地』で「私自身は、聖路加病院の発足は1896年6

月13日とすべきだ——と考えている。」と述べた(203頁)。1896年6月13日は築地病院が築地居留地37番に移り、英語名が St. Luke's Hospital に改められた日付である。トイスラー医師は初代院長でなくなるが、この日付であれば病院の歴史が約5年早まることにもなり、経営陣に受け入れが可能なのではないかと考えた次第である。

9. ペリー姉妹と聖アンデレ同胞会

病院側に一つ提案したいことがある。トイスラー医師が1901年1月後半からしばらくの間通った佃島の聖アンデレ診察所は、前述のように現在の住居表示では中央区佃二丁目11番地にあった。

当時の日本では米国及びイギリスから派遣された聖公会系の三つのミッションが活動していた。米国聖公会、イギリス海外福音伝道会 (SPG) 及びイギリス教会伝道協会 (CMS) である。さて、SPG の Edward Bickersteth は1886年(明治19年)の来日であるが、彼は東京で聖アンデレ伝道団(男子、St. Andrew's Mission) 及び聖ヒルダ伝道団(女子、St. Hilda's Mission) を設立した。当初、SPG 及び CMS は在日のイギリス人主教をもたず、1873年(明治6年)末、三つのミッションは東京でウィリアムズ師の下に協力体制をとることとなった¹⁸⁾。同じ聖公会系の宣教医師トイスラーが1901年1月後半、佃島に聖アンデレの名称をもつ診察所を開設することで聖アンデレ伝道団に協力したことは、自然の成り行きであったといえるのかも知れない。

聖アンデレ伝道団の事業の一つは佃島での伝道であったが、その開始はいつごろのことであったのか。トイスラー医師は聖アンデレ伝道団が佃島で購入または借り入れた建物で診察所を開いた。筆者の想像であるが、佃島における聖アンデレ伝道団の伝道活動は必ずしもうまくいかず、また佃島の衛生状態が劣

悪であったため「医療伝道」に軸足を移すこととし、トイスラー医師の協力を仰ぐこととしたところ、彼は聖路加病院の「復活」の前後で多忙であったにもかかわらず、快く承諾したのではないか。

しかし、トイスラー医師にとって、聖路加病院と聖アンデレ診察所との「掛け持ち」はやはり重荷であったと思われる。したがって、診察所の方は1年程度の活動ののちに閉鎖せざるを得なくなったのではないかと考えるのである。

図版6は1911年(明治44年)当時の東京府京橋区の一部を示すものでトイスラー医師が同区明石町から佃島に通ったところより約10年後に作成されたものであるが、同医師の住居(明石町13番地)、彼が利用した佃島の渡しのコース、聖アンデレ伝道団が京橋区佃島新佃島西町二丁目15番地にもっていた建物(ここに聖アンデレ診察所が開設された。)、築地病院があった船松町13番地、同病院の移設先である築地居留地37番(のち明石町37番地、ここで聖路加病院が再開された。)等の位置がはっきりするであろう¹⁹⁾。

かくて中央区佃二丁目11番地(かつては京橋区佃島新佃島西町二丁目15番地)は旧築地居留地37番と並んで聖路加国際病院の発祥地である、少なくともその「出張診察所」であり、病院より早く設立された、といえる。ここに記念碑を建立したらどうか、というのが筆者の提案である²⁰⁾。

10. ペリー姉妹の料理番

(1) 一つ付け加えるならば、『築地外国人居留地』で述べたように、築地外国人居留地5番に住むペリー姉妹(Miss Fanny M. Perry 及び Miss Anne M. Perry) は米国聖公会のメンバーで、築地居留地の自宅で聖書購読会を開いていた。そして、この購読会の男子メンバーが佃島で伝道活動を行なうことと

なった(205頁、注2)。男子メンバーは聖アンデレ伝道団に所属していた人々であろう。

(2) ベリー姉妹について知られているところは少ない。

拙著『築地外国人居留地』の「参考文献」で書いたように、幕末以降の在日外国人の人名録には主なものに“*Japan Gazette*”*Hong List and Directoy* (のち *The Japan Directory*) 等4種類がある(238頁)。これらは立脇和夫氏の監修により全48巻の『幕末明治在日外国人・機関名鑑』にまとめられている(ゆまに書房、1996-7年)。いずれ同書を組織的に読むつもりであるが、ベリー姉妹についてこれまでに判明したところは次の通りである。

(a) *The Japan Directory* の1889年版の“Religious Bodies”に姉妹の名は出ていない。この人名録には“Alphabetical List”(以下「索引」とする。)があるが、ここにも掲げられていない。(したがって、姉妹がいつ来日したのか不明である。)

(b) 1890年版の“Religious Bodies”にもないが、Alphabetical ListにFanny M. Perryが“5, Tsukiji, Tokyo”を住所として掲げられている(189頁)。仮説に過ぎないが、姉がまず来日、築地居留地5番に住んだことが考えられる。

(c) 1891年及び92年版では“Religious Society”欄のAmerican Presbyterian Missionの在京メンバーに姉妹の名があり、住所は上六番町5番地となっている(49、50頁)。

(d) しかし、1893年版の「宗教団体」の欄には姉妹の名はなく、索引には妹のAnne M Perryが載っている。住所はふたたび築地居留地5番となっている(49頁)。

(e) 1894年版でも索引にAnneの名がある(214頁)。American Presbyterian Missionのメンバー・リストにも彼女の名があるが、氏名に十字架(らしきもの)が付されている(48頁)。筆者は、1人日本に残った妹が築地で死亡したのかと思ったが、不思議なことに

1896年版の索引では彼女の名には十字架は付されていない。

(f) 1898年版では、索引にAnneの名が築地居留地5番を住所として掲げられている(332頁)。1899年版も同様である(344頁)。

(g) 1890年版では「宗教団体」の欄に出ているが、住所は駿河台に変更されている。しかし、索引ではAnneの名がふたたび十字架と共に、また築地居留地5番を住所として掲げられている(189頁)。

Anneは日本で亡くなったのか、または姉を追って帰国したのか、そしてそれは一体いつであったのか、是非知りたいものである。現在のところ、彼女たちの出身国さえ筆者は知り得ないでいる²¹⁾。

(3) ところで、信州松本の旧藩士に野村高治(嘉永3年、すなわち1850年ころに生まれ、1930年=昭和5年に死亡)という人がいた。2016年(平成28年)7月、彼の曾孫にあたる村上隆氏(大阪府茨木市に住んでおられる。)から連絡を頂いたのであるが、これによると高治氏はベリー姉妹の従僕兼料理番を勤めていたという。高治氏が居留地5番に住んだのか域外からここに通っていたのかは明白でないが(おそらく後者であろう)、高治氏は姉妹に教わった西洋料理のレシピを我流でメモしており、これがまだ保存されているという。この事実は、築地居留地に住み着いた外国人の生活ぶりを知る上で、また日本の洋食史の観点から見て、興味をもてるものかも知れない。

11. “Tsukiji Dispensary”について

筆者が7.で述べたように、1890年11月、長田重雄医師が船松町で開設した愛恵病院は英語名がTokyo Dispensaryであった。同病院は1896年6月、築地居留地37番に移転して築地病院となった。英語名はSt. Luke's Hospitalである。

(1) さて、1999年9月1日付『明るい窓』に寄せた「築地居留地にいた外国人医師」(5)でも述べたが(3-4頁)、*The Japan Directory* を眺めていると1881年版あたりから Tsukiji Dispensary を称する施設が築地居留地またはその周辺に存在していたことに気付く。A. W. Thomson の名が添えられており、アドレスは当初は南小田原町四丁目、1889年版あたりから明石町18番地となる。なお、Thomson には Dr. のタイトルは付されていない。

The Japan Directory は横浜で毎年刊行されていたが、大体前年の状況を示していると考えてよいであろう。(*The China Directory* 及び *The Chronicle and Directory for China, Japan and the Philippines* は香港で発行されていたため、日本のデータは1年以上前のものであった可能性がある。)したがって、築地居留地が日本の地方組織に組み込まれ、京橋区明石町となったあとの状況は1890年版あたりから人名録に反映されるようになったと考えられる。この点に留意しながら *The Japan Directory* をさらに紐解いていくこととしよう。

1891年版の“Miscellaneous”の欄に Tsukiji Dispensary が依然として Thomson の名と共に、そして18, Akashicho, Tsukiji を住所として掲げられている(43頁)。そして、1892年版以降も同様で、ようやく1903年版から掲げられなくなった。(1899年版から“Miscellaneous”ではなく、“Tsukiji”の欄に掲示されるようになった。)

(2) それでは、“Tsukiji Dispensary”とはどのような施設であったのか。拙見では築地病院(愛恵病院の後身)または聖路加病院とは別の医療機関であったのではないかと思う。一方、A. W. Thomson については、『明るい窓』で述べたように、彼は虎の門にあった工部大学校(のちの帝国大学工科大学)で土木工学及び測量術を教えていた人物であ

る。これも拙見であるが、Thomson は医者ではないが(人名録で Dr. のタイトルが付されていないのも当然である)、何故か自宅をもたずに Tsukiji Dispensary に居を構えていたのである。あるいは何か持病を抱えていたのかも知れない。この点はさらに関連資料を探すこととしたい。

[付記1] 荒木いよの帰国

『八十年史』も『百年史』も、聖路加病院の初代看護婦長・荒木いよについて触れている。在京の宣教師 Miss Irene P. Mann の許で働いていた荒木の才能を認め、彼女を渡米させてヴァージニア州リッチモンドのオールド・ドミニオン病院で研修することにトイスラー医師が大きく貢献した。例えば『八十年史』は、荒木が Miss Mann に付き添って1900年(明治33年)3月14日、横浜を離れて米国に向かった、と述べ²²⁾、また「病院開院前に荒木看護婦は留学を終えて帰国した。トイスラー院長は早速、荒木看護婦を婦長に任命した。」と記述する(7頁)。これもトイスラー医師の最初期の「成果」の一つに違いないであろう。

筆者は、荒木いよが正確にいつ帰国したのか知りたいと思い、先日、国立国会図書館へ行って *The Japan Weekly Mail* を閲覧した。(この英字週刊紙は、すでに2. で引用した。)同紙の“Latest Shipping”欄は毎週横浜から出港し、また同地に入港した船につき、名称、トン数、運営会社名、船長名等のほか一・二等船客の名簿を載せていた。しかし、三等船客は“in steerage”に何名、と記載されるだけで氏名は明らかにしていない。また、一・二等船客にしても紙面に余裕のない場合は名簿を載せない。*JWM* を丁寧にチェックしたが、ついに荒木いよの名前を発見できなかった。彼女が「病院開院前に(すなわち1901年2月12日までに)…帰国した」かどうか確認できなかったのである。機会があればもう一

度チェックしたいと思う。

[付記2] 病院の歴史年表

筆者は本文5. で聖路加国際病院の西口近くの壁面にある聖路加国際病院の歴史年表に「1902年（明治35年）2月 聖路加病院設立」と記されていると述べたが、2017年（平成29年）3月9日、「1902年（明治35年）2月」が「1901年（明治34年）2月」に書き改められた。

「はじめに」で述べたように、筆者は2002年ないし2003年に聖路加病院の開院は1901年2月である旨を発表した。しかし、『新約聖書』を引用するのは僭越かも知れないが、当時はこの主張は少々大袈裟に言えば Φωνή βοώντος εν τη ερήμω、すなわち「荒野に呼はる者の声」（「ヨハネによる福音書」、I, 23）であった。その後大江満氏による新資料の発見で正確な日付が明らかになり、これが2017年1月号の『明るい窓』で紹介された。上記歴史年表の書き換えで、ようやく病院は1901年開院という事実を受け入れたことになるのであろう。（2017年5月26日記）

注

- 1) 拙訳は次の通り。「歴史はまさに時代の証人であり、真実に光を当て、記憶に生命を与え、人生のガイドとなり、古い時代のニュースを伝えてくれる使者（である）。…」
- 2) *Chapel News*、『明るい窓』などに掲載の関連論文のうち、主なものを示せば次の通り。

聖路加国際病院『明るい窓』掲載論文

「愛恵病院」・「築地病院」について—聖路加病院の先駆けとなった諸施設—(1)～(5) (1998年9月—1999年1月)

トイスラー院長のアピール (I)、(II) (1999年3月、4月)

築地居留地にいた外国人医師(1)～(7) (1999年5月—11月)

宣教医師ハレル博士について(1)、(2) (2000年6月、7月)

立教学院チャプレン室 *Chapel News* 掲載論文

米国大使館・米国聖公会の築地時代—総合年表の試み—(1)、(2) (2001年9月、10月)

聖路加病院の歴史 その1 トイスラー医師と佃島診察所(1)～(7) (2001年11月—2002年6月)

聖路加病院の歴史 その2 聖路加病院はいつ開院したか(1)～(9) (2002年9月—2004年1月)

聖路加病院の歴史 その3 築地にあった病院・施療所 (2004年4月)

聖路加病院の歴史 その4 聖路加病院の敷地拡張(1)～(4) (2004年5月—12月)

米国大使館・米国聖公会の築地時代—総合年表の試み—(1)、(2) (2001年9月、10月)

立教大学史学会『史苑』掲載論文

築地居留地の「予備地」—米国聖公会が入手するまで— (2003年11月)。

- 3) 雄松堂出版のはち雄松堂書店と改称したが、さらに丸善株式会社と経営統合し、2016年2月から社名を雄松堂株式会社に変更した。
- 4) 同じ欄によると香港丸は香港を出発、途中複数の港に立ち寄ったともいうが、これは誤りであろう (150頁)。
- 5) 『聖路加国際病院創設者トイスラー小伝』(聖路加国際病院、1968年、改定版：1900年)、12-3頁。トイスラー夫妻が宿泊したホテルはホテル・メトロポール(明石町1番地)であろう。1900年はじめに京橋区明石町またはその周辺にあったホテルはホテル・メトロポール及び築地精養軒ホテルの2軒しかなかった(拙著『築地外国人居留地』、142頁)。
- 6) 聖公会関係者のアドレスに関しては、筆者は立教大学史学会『史苑』2003年11月号に寄せた「築地外国人居留地の『予備地』」で触れている (128-9頁)。
- 7) 『基督教週報』は米国聖公会系の月刊誌『教界評論』の後継誌である。諫山禎一郎氏によると、『教界評論』は1900年(明治33年)1月まで刊行された(日本聖公会歴史研究会『歴史研究』、第10号[1999年6月]、10頁)。なお、

- 『教界評論』は注14で引用する。
- 8) この広告では「院開広告」と誤植されている。1901年2月15日付に載せた広告では誤植が正されている (*Chapel News*、2003年2・3月号、27頁)。
- 9) 加えて、トイスラー医師は1900年(明治33年)4月、医籍登録者となった。内務省が『官報』第5,034号の広告欄に「醫術開業免許ヲ授與シ醫籍ニ登録セシ者左ノ如シ」として掲げる者の一人に「ルダルフ、ボリング、トイスラー」がある。(龍溪書舎は官報の複製版を刊行したが、明治篇第9巻(4)[1987年刊]は明治33年4月分を収めており、232頁に当該の広告が掲載されている。)
- 10) 東京都編・刊『近代東京の渡船と一銭蒸気』(1991年)によると、渡し船は1870年9月ころ(明治3年8月ころ)から佃島の家主たちが差配していたが、1887年(明治20年)1月から全島の共有物として管理されるようになった。1901年(明治34年)に渡し舟の経営は東京市に移管され、有料の手漕ぎから無料の曳船渡船(動力船が客船を曳く。)に改められた。翌1902年7月より曳船は2隻となり、交互に運転するようになったという(58-60、68頁)。佃島の渡しは1993年(平成5年)8月26日、佃大橋が完成するまで存続した。
- 一方、同年東京湾滞筋浚渫工事の施行が決定され、一号地、二号地及び新佃島の3工区の区分が定められた。本稿にとくに関係のあるのは新佃島であるが、この区分の工事は1890年(明治23年)に着工された。1896年(明治29年)9月に竣工、同日新佃島西一〜三丁目及び新佃島東一〜二丁目の町割が東京市京橋区に編入された。現在の住居表示では東京都中央区佃二〜三丁目である。
- 11) 私事にわたるが、筆者は1999年(平成11年)5月15日から中央大橋通り沿いのマンションに住んでいる。当時、*The Crest Tower*がある場所には13階建ての日本鋼管株式会社佃島社宅があった。この社宅は2001年(平成13年)5月から解体され、翌年5月、*The Crest Tower*の建設が始まったのである。
- 12) ウィリアムズ主教は1873年、大坂(のち大阪)から東京へ移ったが、翌年に江戸専任の主教となった。しかし1889年10月18日、主教としての辞表が受理され、以後一牧者として伝道に従事した(大江満『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯―幕末・明治米国聖公会の軌跡―』[刀水書房、2000年]、253-4頁、592頁)。
- 13) 長田医師は1890年(明治23年)11月1日、ウィリアムズ師の要請で愛恵医院を開設したが、船松町は隅田川沿いの町地にあり、1869年1月1日(明治元年11月19日)の東京開市に伴って開設され築地居留地のすぐ北側にあった(図版6)。船松町を含むいくつかの町は、同日をもって相對借り地域(北)となり、外国人はここで住宅を借りて住み付くことができるようになった。
- 14) この日付は1897年7月10日付『教会評論』による(拙著、203頁)。なお、大江『宣教師ウィリアムズ…』を参照されたい(486頁)。
- 15) 大江『宣教師ウィリアムズ…』も築地病院の英語名が「聖ルカ病院」であった旨指摘している(486頁)。なお、ウィリアムズ主教は上京する以前、大阪でも聖バルナバ病院を開院することに尽力している。同病院は1879年(明治12年)10月、川口居留地7番の一部及び8番に建設された。
- 16) 2002年12月の *Chapel News* に寄せた拙稿を参照されたい(25-6頁)。
- 17) 同じ表現を、Henry Saint-John (Lord Bolingbroke) が1738年出版の著書 *On the Study and Use of History* で使用しているという。
- 18) 大江『宣教師ウィリアムズ…』、410頁。拙著『築地外国人居留地』では「聖アンデレ同胞会」としたが、*St. Andrew's Mission* は「聖アンデレ伝道団」とも訳されるのであろう。なお、聖アンデレ同胞会の活動については細貝岩夫『聖アンデレ教会小史』(1954年)がある

というが、筆者は未読である。

- 19) 出典として掲げた東京通信管理局編『東京市京橋区』は、東京都中央区京橋図書館編・刊『郷土室だより』の2008年（平成20年）10月号の附録となっている。
- 20) 聖アンデレ伝道団が使った建物の写真が前掲の『八十年史』及び『百年史』にある（それぞれ331頁、70頁）。なお、この建物は伝道団が入手するまでは漬物や佃煮を売る店舗であったとのことで、トイスラー医師の令嬢の1人（同医師には1人の息子及び3人の令嬢がいた。）がこれを示す写真をおもちであるという。何かの形で公開して頂きたいものである。
- 21) ペリー姉妹については *Chapel News* の2002年1月号でふれたが（22-4頁）、今後さらに文献を探さなければならない。また、『基督教週報』に名前が出ているウッド、海保熊次郎等につ

いても同様、関連情報を求めたい。これにより、聖アンデレ伝道団（同胞会）に対するトイスラー医師の貢献ぶりや聖アンデレ伝道団と聖路加病院との関係について新しい情報が得られるのではないかと考える。長田重雄医師についても同断である。筆者は、同医師が浅草で経営していた小児科病院の広告が『基督教週報』の1901年11月1日付（16頁）に載っているのを発見、*Chapel News* の2003年9月号で紹介したことがある（23頁）。筆者は、長田医師は小児科病院を経営するかたわら船松町（のち築地居留地）に「掛持ち」で通ったのではないかと考えている。

- 22) 2人の出港は1900年3月14日というが、同年3月10日付及び3年24日付の *JWM* はあるものの、彼女等の乗船記録が載っていると考えられる3月17日付は国立国会図書館に欠けている。